

§ 1.1 SCE・Net はどうして出来たのか

中島 幹（顧問・初代代表幹事）

2009年10月23日 SCE・Net 設立時の顔ぶれが 化学工学会の応接室に集まって往時を振り返る懇談をした。それぞれに思い入れと熱意をもって取り組んでいたことが思い出されたが、その時期に苦労したことを紹介してみる。

1. 設立の背景

1990年代企業の経営状況が厳しくなり、現役の技術者は日々の業務に追われ中々学会活動に参加する時間を作り難くなるとともに、学会への期待も少しずつ変化し、化学工学会の行事への参加者数が減ってくるなかで部会制への移行が進められ企業に所属している技術者にとっての化学工学会の魅力がいかにか作るかが学会特に産業界を対象としては大きな課題になっていた。

そのころ 中国委員会が中国の化学工場の技術向上を目的に中国化工学会に協力して進めていた設備技術交流会や技術研修には、シニア技術者が豊富な経験をもとに講師として活躍されていた。また 開発型中堅企業連携委員会（通称：開発型企業の会）では 中小・中堅企業のグローバルな事業展開や経営管理、品質管理、環境対応、安全対策などと次々に複雑化、高度化して行くことへの対応が課題として認識されていたが、企業内の限られた人材では十分な解決策が見出せない状況があった。

一方で我が国の高度成長期に活躍したシニア技術者が、定年あるいは早期退職を余儀なくされ、心ならずも毎日を悠々自適と趣味の生活に過ごし、その豊富な経験や知識を発揮し損ねて居ることが聞こえてきて、このようなミスマッチングは社会的な損失であり、もったいないと思っていた。

そんな 1999年の正月 産業機械工業会の新年会で 1985年設備技術交流団のメンバーとして中国に同行した松村眞さんと偶々会ったときに、エンジニアリング会社を定年退職しこれから社会の為に経験を生かしたいとの話があり、私も上記の思いを話したところ、賛同する方も少なからず、新たな仕組み作りが動き出したのである。

2. 暗中模索の仕組みづくり

どんな仕組みを作れば、考えていることを具体化できるのだろうか。言い出した松村さんを初めとし、元東しの岩村孝雄さん、元 TEC の篠原孝順さん、徳寿工作所の命尾晃利さん、工業調査会の一色和明さんと当社の斎藤浩、中島の7名の思いは必ずしも同じではなかった。

毎月1度のペースで幾度も会合を重ね知恵を出し合いながら、往きつ戻りつの議論を重ね構想を作り上げていった。今でこそ他の学会でも退職シニアの組織化をしているところがあるが、その当時はまだ手本を探しても見つからず、ゼロから自分達で作らなければならなかった。

3. 基本構想とインターネットの利用

技術者が持っている様々な経験・技能（シーズ）と企業からの広範囲な問い合わせ・課題（ニーズ）を適切に結びつける仕組みをつくることに最も頭を悩ましたところであった。

秘密保持を保ちながら問い合わせ側の意図をくんで適任の技術者を選び出し、繋ぐ仕組みを作るところに松村さんと斎藤さんが苦勞をした。システムに詳しい東レの宮木宏尚さんに参加してもらい遠隔地医療に使われているシステムを利用しようと渋谷にあるシステム会社を訪ね、良く出来た仕組みの説明を聞きその機能の一部を利用させてもらうことが決まった。

この構想を検討しているときに、同じ思いを持って山口県で中国に対してボランティア活動をされていた徳山積水の田中雅人さん、退任されて宇部に戻られていた吉森忠彦さん、大阪の関西化学機械の野田秀夫さんなど遠方からも応援の声をいただき東京地区だけに止まらず地方からも参加できるようにすることや、退職された方々にとって最も負担に感じるのが交通費の負担であることから、顔を合わせずとも連絡ができる仕組みとする為その当時普及し始めたインターネットのメールによる連絡を基本とするネットワークを構築することになった。

4. 予想外な法人会員集めの苦勞

技術を提供する個人会員は結構集ったものの、依頼側の企業の会員が思うように集まらない。この仕組みの採算性を検討したときは 企業会員は簡単に集まり 20 – 30 社位が参加してくれるであろう。1 社 5 万円の年会費でもって運営に必要な資金収入が得られるとの皮算用をしたが、中々どうして知り合いの企業の経営者を訪ねては新しい構想を説明すると皆さん異口同音に良い仕組みだと好評なので参加を期待したがいざ入会手続きをとると二の足を踏まれる。わずか 5 万円の会費といえども財布の紐の硬い経営者に感心するとともに、新たな仕組みの効果を納得して頂く難しさを実感した。

5. 「進化する化学技術」の出版

化学工学会では 以前から法人会員の優秀な技術に対して技術賞として毎年表彰している。しかし世間一般に伝わるのが少なく、残念ながら受賞の感激もあまり大きくない。そこで、それまでの約 30 年間の技術賞 125 件の中から各社に 30 冊の購入協力をしていただくことで 50 件を選定、それぞれの受賞技術について SCE・Net のメンバーが着眼点などの解説リード文を付けて「進化する化学技術」として出版することを企画した。これが実行できたのは中心となってまとめた編集長の岩村さんと出版に詳しい工業調査会の一色さんが技術書にしては珍しい縦書きにすべしとのアイデアや装丁 PR 等大変な協力をして頂いたお蔭であるが、各社の協力が得られたこと、当時の副会長樋口敬一さんや出版委員会亀山秀雄先生のご支援も大きかった。

この経験が 出版をすることによる結束力に役立った。

6. NEDO の補助金審査の事前評価作業

未だ補助金審査にピアレビューの制度が作られる前であった。申請内容の評価作業は中々高度の知識と手間の要る仕事で、当時工業技術院技術審議官の増田優さんの紹介で NEDO から評価の事前作業を受託することが出来た。数人でチームをつくり短期間で多くの評価作業の手伝いをする中で

連帯感が強くできた。その作業の中心は元 TEC の横井正さんであった。

コンサルタントの仕事に差し支えるほどの作業量であったが夏休みを返上しボランティアそのものであった。この作業のお蔭で SCE・Net が化学技術者のデータベースとして認知され、NEDO の評価委員推薦につながり、シニアエンジニアの組織としての知名度が上がった。

7. 学会からの支援

当時の経理理事であった三菱重工の伊藤俊明さんから、苦しい学会財政の中で SCE・Net に学会活動としての予算を付ける為に、会計処理について会計士とも相談されて指導していただいた。Net 会員が専門家として作業をし、依頼者から謝礼を受ける時の方法や条件、学会本部の会計処理との経理上の分離など、初めての仕組みづくりであったので途惑うことが多々あった。

企業会員が予定したように集まらず収入不足のなかで、まずは Net を軌道に乗せるために外注しているシステムの管理費や事務経費などの費用が必要であった。軌道に乗るまでとの条件付ながら費用の補助として 20 万円の予算をつけてもらうことが出来て、システムの改善や事務作業の謝礼補助が出来るようになった。まだ本部としての情報システムが整備されていなかった時代であった。

8. ボランタリー精神での事業運営

発足時は学会活動の一つとして、かなりボランタリー精神が強く出ていた。問い合わせ案件に対する作業の謝礼をいくらにするかの議論も大変であった。技術価値の評価と対価の議論は尽きなかったが、出発点はボランタリーであること、対価として社長のポケットマネー程度で処理で出来る範囲とすること、多くの会員に参加の機会を作るなどから、1 案件半日仕事で 1 万円を基準に 3 日を限度にすることにした。

支払いも依頼者から技術者に直接支払いをしてもらうことにして、学会は費用の流れには入らないことや、事務局作業はまったくのボランティアであった。しかし作業が多くなると事務局作業も増え、専任者が必要になり、溝口さんが参画して運営方法もはっきりした。

1999 年正月の松村さんとの出会いから、毎月準備の為に打ち合わせ会議を経て 2000 年 4 月の設立総会、実際の運営での様々な出会い、2003 年 4 月に岩村さんに代表幹事を引き継ぐまでの立ち上げのことがいろいろと思い出された。

人は毎年 1 才づつ年をとるので、引き続き SCE・Net は様々な経験を身に付けた経験者を迎えることが出来る。

時代の要請は時と共に変わって行く。進化する SCE・Net であり続けることを願って筆を置く。